

保健体育科教員の考える性教育の目的に関する一考察

反 橋 一 憲

1. はじめに

本稿は、学校での性教育が社会からの期待に沿うものであるか否かを検討するために、中学校と高等学校の保健体育科教員が性教育の目的をどのように考えているかを、インタビュー調査を通して明らかにするものである。その際、その目的が保健体育科の枠内に留まっているかと、それが学校の特性によるものであるかの2点に着目する。

昨今の日本には人工妊娠中絶や HIV/AIDS、性感染症など性に関する諸問題がある。あるいは人々の性的な権利の拡大という国際的な流れの中で LGBT⁽¹⁾と呼ばれる性的少数者への関心が高まっている。このような状況を受けて、性の問題を解決するとともに性の多様性への理解を涵養するための性教育が求められている。特に、学校が果たす性教育の役割は大きい。中澤（2013）によれば学校はマスメディアやインターネット、友人などと並び主要な性の情報源である。また、中澤は「正しい知識は必要だけれど、どう教えたらいいかわからないし性のことをなんて恥ずかしいから、学校できちんと教えてもらいたいという感覚があるのではないだろうか。」(p. 178) と、一般家庭が学校に性教育の実施を期待しているのではないかとしている。このように学校に対して性教育の期待が高まる中、学校での性教育にはそのような期待との乖離があるのだろうか。あるいは親和性があるのだろうか。そこで本稿は、教員がどのような目的意識で性教育を行っているかを明らかにすることで、学校での性教育が社会からの期待に沿うものであるか否かを検討する。

本稿で教員に着目する理由は、性教育が教員に委ねられている部分が多いからである。国は性教育について指針のみを示しており、性教育の具体的な実施方法や内容は地域や学校に任されている（茂木 2007）。さらに、田代・艮・渡辺（2009）は性教育に熱心な教員とそうでない教員で性教育への取り組み具合が異なることを示唆する。そして、特に保健体育科の教員に着目するのは、性教育が保健体育科で最も行われるものであるからである。性教育を取り扱っている教科として最も多いのは保健体育科である（橋本他 2011）。生徒も主に保健体育科の教員から性教育を受けたと認識している（岡部・佐鹿・大森他 2009）。以上の理由から、本稿では複数の保健体育科教員に性教育の目的意識を尋ね、それらの異同に着目しながら分析を行う。

本稿のように教員を対象に性教育に関する意識調査を行った研究にはいくつかある。例えば、遠藤・中野（2006）は教科を保健体育科に限定していないものの、中学校と高等学校の教員を対象に性

教育の現状や問題点、性教育のイメージを尋ね、教員の約70%が性について恥ずかしさを感じているとする。他には、植谷・篠木・藤井他（2009）が高等学校の教員を対象に性教育に対する意識を質問紙で調査し、教員の考える性教育実施の適任者は順に母親、父親、教師、養護教諭と、性教育を行う場合は家庭がより適しているとしている。これらの結果は一見すると学校が社会からの期待に応え得ないことを意味する。しかし、これらは量的調査が主で質的調査に欠き、なぜそのような意識が生じているかの検討が不十分であるため、社会からの期待に応え得ないと早急に結論付けることはできない。そこで、本稿はインタビューによる質的調査を行い、教員がどのような意識を抱いているかを詳細に検討する。

以上を踏まえて、保健体育科の教員を対象に2015年6月から11月にかけて半構造化インタビューを行った。調査対象者は表1のように、高等学校の保健体育科教員を基本としつつ、中高一貫校で中学生も受け持っている保健体育科教員にもインタビューを行った。ただし、勤務校は関東地方の私立校に限られている。氏名は全員仮名であり、年齢・勤務校はインタビュー当時のものである。インタビューでは保健体育科教員の志望理由、性教育を行う際に心掛けていることや生徒の様子、性教育における学校と家庭の関係などを尋ねた。本稿はそこから教員の考える性教育の目的に関する部分を取り上げて分析する。

本稿の流れとして、第1節（本節）にて本稿の概要を述べた後、第2節と第3節でインタビューから得られた教員の目的意識を分析する。その際、第2節では目的意識が保健体育科の枠内に留まっているかに着目する。第2節で詳述するが、性教育は学校の教育活動全体を通して行われるものであり、もし目的意識が保健体育科の枠を超えていれば、教員が高い意識を持っているということであり、社会の期待に応え得るものであると言えるからである。これに加えて第3節では目的意識が学校の特性に依拠するののかという点に着目する。性教育は学校の教育活動全体を通して行われるものであり、保

表1 調査対象者の一覧

| 氏名 | 年齢 | 性別 | 勤務校（すべて関東地方） | 出身大学 |
|-----|----|----|------------------------------------|----------------------|
| 吉 野 | 26 | 女性 | A 中学校・高等学校 ⁽²⁾ （私立・共学） | 私立大学体育系学部 |
| 阿久津 | 34 | 男性 | A 中学校・高等学校（私立・共学） | 私立大学体育系学部 私立大学大学院 |
| 正 田 | 26 | 男性 | A 中学校・高等学校（私立・共学） | 私立大学体育系学部 |
| 小 出 | 25 | 男性 | B 高等学校（私立・共学） | 私立大学体育系学部 |
| 中 山 | 53 | 男性 | B 高等学校（私立・共学） | 私立大学体育系学部 |
| 柴 田 | 35 | 男性 | B 高等学校（私立・共学） | 私立大学体育系学部 |
| 久保田 | 53 | 女性 | B 高等学校（私立・共学） | 私立大学体育系学部 |
| 三 輪 | 59 | 女性 | C 高等学校（私立・女子校） | 私立大学体育系学部 |
| 池 田 | 53 | 女性 | D 中学校・高等学校 ⁽³⁾ （私立・女子校） | 私立大学体育系学部 |

健体育科での性教育といえども学校の特性の影響を少なからず受けることが予想されるからである。最後に第4節で本稿の総括を行う。

2. 保健体育科教員の考える性教育の目的（1）—目的意識の範囲

本節では、保健体育科の教員が考える性教育の目的を、それが保健体育科の枠内に留まっているか否かに着目して分析する。すなわち、保健体育科の枠内に留まっているのか、他の学校の教育活動での性教育と関連があるのか、あるいは性教育全体の目的にまで射程があるのかに着目する。

本節での分析を進めるに当たって、中学校と高等学校の保健体育科の学習指導要領において性教育が各々どのように設定されているかを、反橋（2016）を参照しながら確認する。国による性教育のガイドラインである『学校における性教育の考え方、進め方』を分析した反橋によれば、図1のように性教育は学校の教育活動全体を通して実施されることが求められており、それは性教育における〈性〉の範囲や性教育の目的が広く⁽⁴⁾、知識と価値観の両方を身に付けることが目指されているためとされている。そのため、反橋は保健体育科で行われる性教育が「学校の教育活動全体を通して実施される性教育の一部」（p. 90）であり、各学校段階ともに健康な生活を送るための知識を伝える場であるとしている。これを踏まえて反橋は保健体育科の学習指導要領における性に関する項目を検討し、中学校では「生殖機能の発達により心身に変化が発生することと、それらへの対処方法を身に付けること」（p. 93）や性に関連した疾病、異性の尊重や情報の取捨選択が、高校ではそれらに加えて生徒の社会生活を見据えて結婚生活や家族計画などの社会的なことを理解することが求められていることを明らかにした。以上のことを念頭に置いて本節での分析を行う。

保健体育科の枠内にある目的

最初に、保健体育科の枠内にある目的を見ていく。

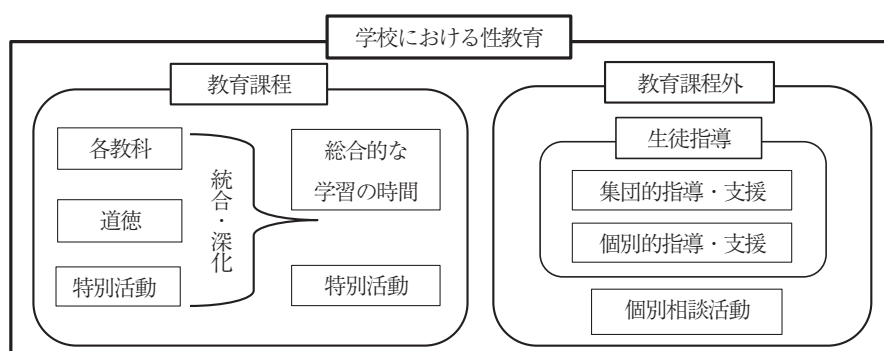


図1 学校における性教育の枠組み

出典：反橋（2016，p. 90）

うーん。意味ねえ。何ですかね。まあでも、生物として生まれてきたからには、その部分というのがすごく重要なことだと思うので。人間として生きていく以上はしっかり分かっているからいかなければいけないことだろうなっていうのは思いますね。〔池田〕（下線は筆者による。以下同様）

池田先生は性教育を行う意味を答えるときに、「生物として生まれてき」で「人間として生きていく」ために必要だと話している。この「生物として」や「人間として」にはどのような意味が込められているのだろうか。池田先生はこれ以上言及していないが、柴田先生の話から解釈を加えることができる。柴田先生は性教育の目的を聞かれて、性に関する問題の防止の他に子孫繁栄のためと答えている。

〔筆者〕性教育の目的は何だと思いますか。しっかりと知識を得て病気を防いだりとか妊娠を防ぐということが性教育の目的となってくるのでしょうか。

〔柴田〕それと、子孫を繁栄することですね。それは動物界と違うんだよということはもちろんですが、国とか地域によってとか（中略）平均寿命のことであったりとか医療技術の進歩とかそういうのがあったとしてもですね。そういうような話もしていきます。

（括弧は筆者による。以下同様）

柴田先生は、性に関する問題を防ぐための知識を伝えることはもちろん、子孫が繁栄するようにすること、すなわち生殖に関して理解をさせることを性教育の目的と考えているとすることができる。生殖は生物が子孫を残す営みであり、人間も生物として子孫を残していかなければならないと考えている。このことから池田先生の話す、生物として生まれてきて人間として生きていくために必要なことは、子孫を残す存在として性について理解をすることと解釈することができる。

このように、生殖について理解させることが性教育の目的であると考え教員がいる。保健体育科における性教育では「生殖」という言葉がキーワードとなっており、生殖について理解させることが保健体育科における性教育の目的となっている。そのため、生殖に関して理解させるという目的は、保健体育科における性教育の目標に沿ったものであるとすることができる。

学校の他の教育活動との関連がある目的

続いて、健康な生活を送れるようにするという保健体育科の枠内に留まらず、他の分野で行われる性教育との関連がある目的を見ていく。

性教育は性感染症であったりとか望まない妊娠であったりとかというところをしっかりと教えていく方がいいと思います。〔柴田〕

柴田先生は性感染症と望まない妊娠の防止を、性教育で教えるべきと考えている。中山先生はその中でも特に望まない妊娠の防止を教えることが性教育の目的であると話す。

〔中山〕要するに（性教育の内容で）一番なのは、未成年で子どもを作ってしまったことが一番良くないことなんだから。生活が成り立たないのに出来ちゃったというのは。そこをしつかり抑えられればいいと思うんですね。

〔筆者〕性教育の目的はそこにあると。

〔中山〕うん、やっぱりそこだと思うんですよ。後は、家族計画みたいなもの一緒でしょ。結局性交して、今度は子どもができて、子どもを育てるという、そういう段階が出てくるわけだから。まずその一段階目、失敗しちゃえば高校生でできちゃう、中学生でできちゃう。そうすると、世の中ではあまりよろしくないこと。そこを抑えないと、逆に子どもが可哀想だし。生まれてくる子ね、それは本人達じゃなくて。

（括弧内補足は筆者による。以下同様）

中山先生は未成年の妊娠が良くない理由を、自力で生活ができない未成年者（中高生）が妊娠することは社会的に良くないとされていること、そのような未成年者のところに生まれてくる子どもは幸せにできないことを挙げている。

性に関する問題の防止は健康な生活を送る上で重要である。健康な生活を送るためには性感染症などの病気の予防は欠かせない。また、望まない妊娠をした場合、特に人工妊娠中絶を選ぶと心身ともに母体への負担は大きくなる。そのため、性感染症の予防や望まない妊娠の防止など、性に関する問題の防止を教えることは生徒の健康な生活につながるので、保健体育科における性教育の目的に沿っていると言える。しかし、性に関する問題の防止には、同時に生徒指導的な一面も存在する。中山先生は望まない妊娠の防止を、母体の健康を守るというよりも社会的に良くないことをさせないという面で強調しており、社会規範を守らせる生徒指導としての目的と解釈することができる。すなわち、性に関する問題を起こさないように生徒を指導することは、性に関する問題を起こさないようにすることを目的とした生徒指導における性教育の目的と解釈することができる。

このように、性に関する問題を防ぐという目的は保健体育科の枠内に留まるだけでなく、生徒指導における性教育の目的とも受け取れる。つまり、保健体育科の授業で性教育を行いながらも、その目的を生徒指導的なものとして考えている教員がおり、そのような教員の考える目的は他の教育活動における性教育の目的と関連を持つと言える。

生徒指導以外の活動の目的と関連がある場合もある。それは、情報を判断する基準となる正しい知識を教えるということである。三輪先生は、アニメには性に関する表現が多く、そこから性に関する情報を得る生徒が多いことについて次のように言及する。

（アニメから得る情報を）こういうものだってことが自分たちで納得してしまうところがあって、申し訳ないけれど誤った、または興味本位の形の中身で、それで満足してしまっている部分があるのでね。だから正しい性教育が、どこでどういう風に自分達が得て自分のものにしていかなければいけないかということを、我々は問うていかなければいけないだろうと私は思い、授業しているということなんです。多分教科書に書いてある通り理解しようとする人は少ないでしょうね。授業やって教科書に書かれている中身を子どもたちが再確認できるように。またちゃんと自分達が開いて見れるように、ということがせめて私たちが教育している中に、できるようになってことが我々の使命だし、性教育をする意義があるであろうし、命の尊さが繋がっていくことになるであろうと。〔三輪〕

アニメなど各種メディアから得られる性に関する情報は、時に誤っていたり興味本位だったりするが、それを疑いもせずに受け入れてしまう生徒がいる。生徒がそのような情報に出合ったときに教科書を確認するなど、正しい知識に立ち戻れるようにすることが教員の使命であり性教育の意義であると考えている。保健において性に関する項目を扱うときは、中学校では「情報への適切な対処や行動の選択が必要となること」（文部科学省 2008, p. 83）を、高等学校では「性に関する情報等への適切な対処」（文部科学省 2009, p. 75）を各々取り上げるよう学習指導要領で定められている。そのため、学校で正しい知識を教えることで情報の判断基準を持たせることは保健における性教育の目的に沿っていると言うことができる。

ただし、三輪先生は性教育の最終的な目的は命の尊さを生徒が理解するところにあると考えている。命の尊さについて詳しくは後述するが、命の尊さを理解することは道徳と関わってくる。三輪先生にとって情報の判断基準を持てるようにすることは、命の尊さを理解するという性教育の最終的な目的のためである。

正しい知識を教えるということに関しては池田先生も言及しているが、三輪先生と同じように道徳的な面を教えるために、正しい知識を持たせることを性教育の目的としている。池田先生は性教育の道徳的な部分について次のように話途中で、情報の判断について言及する。

道徳面なんていうのは、そのしっかりした知識を持ちましょうねってことを伝えることで道徳面もしっかりしてくると思うので。要するに雑誌であったりとか、テレビで誇張して言っていることであるとか、そういうようなことが本当に正しい情報源かどうかというのは考えなきゃだめよとか、そういう意味の道徳的な指導はしますね。だから、学校で教えてもらっていることは、これは確実なことだから、ちゃんと知識に入れなきゃダメよとか、耳を背けて知らないようにしちゃうのはだめよって。逆にちゃんと知っておきなさいって話をしますね。〔池田〕

池田先生は、正しい知識を伝えることで道徳的な部分を教えることができると考えている。この場

合、リテラシー能力を身に付けることが道徳的な教育であると考えている。このように、性に関する正しい知識を教えること自体は保健体育科における性教育の目的であると言えることができるが、教員は性に関する正しい知識を教えることで保健体育科に留まらず道徳にも関わる目的を持っている。つまり、保健体育科の目的だけでなく他の活動とも関わる目的を持っているのである。

さて、前述したように三輪先生は命の尊さを教えることが性教育の目的であると考えている。三輪先生は命の尊さを教えることについて次のように話す。

（先生方は）命を大切にしなければならないという根本から性教育をなさっています。命の尊さですね。その中に、性教育という指導の方法が入ってくるんですよ。私も今現場で高校生に対してですね、特に女子ですから本校は、いかに今自分の与えられた命が大切なものか、そして今ここにある命がどういう形で育ってきたものなのかという指導を性教育として全部入れています。〔三輪〕

三輪先生は命の尊さを教えることが性教育の目的であると考えており、命の尊さを教えるための手段の1つとして性教育を見なしている。そして、この命の尊さを教えるということは、単に知識を教えるだけでなく道徳的な部分にも関わってくると三輪先生は考えている。

今道徳教育に入ってきたというのは、命の尊さということを問うために入ってきている部分がある訳ですよ。性教育と言っていることよりも、そこに結びついていくわけですよ、現実的にはね。で、なおかつ、行為だけではなくて精神的な面でのコントロールの仕方、そういうところを問わないと、命の尊さということに結びついていかないわけですよ。〔三輪〕

性教育は単に知識を教えるのではなく、精神的に自身を律することなど、道徳的な部分を涵養することが命の尊さにつながると考えているのである。すなわち、健康な生活を送れるようにするという保健体育科における性教育に留まらず、道徳との関連を意識している。また、保健体育科における性に関する授業はあくまでも性教育の一環に過ぎないとも考えているのである。

学習指導要領の枠を超えた目的

ところで、性教育に関心の強い教員は、性的少数者への理解までに性教育の目的を広げている。

ゲイの話をする、（中略）子どもたちが気持ち悪いと言うとか、あり得ないとかね。その瞬間にもしこのクラスにいたらどうするのって。私はその話ができるけど、他の先生にもそういう話をしていただきたいと思う。いるよって。（中略）だから、まずは打ち明けられたらありがたいでしょって。好意を持ってくれてありがとう。でも、私は同姓には興味がないっていうか、

パートナーがいるからお付き合いできないっていうか、気持ち悪いというのはおかしいだろう。やっぱり色んな人たちがいて、認め合わなければ、命を絶つのが多い人もいますよね、それに悩んじゃって。その話を真剣にします。だけど、教科書に載っていないので、そこまでの話をする先生がうちの学校も含めて幾人いるか。〔久保田〕

久保田先生は性教育の研究団体で活動したことがあり、性教育に関心が強い。久保田先生は生徒に、性的少数者は身近にいる可能性があり、拒絶するのではなく認め合わなければならないと教えるようにしている。しかし、この部分を取り上げる教員は少ないと久保田先生は推測している。性的少数者である児童・生徒への関心は最近高まりつつあるが⁽⁵⁾、まだ強いとは言えない。学習指導要領にも性的少数者に関する記述はない。性教育に関心の強い教員は周囲の教員の関心がさほど強くない性的少数者など、学習指導要領の範囲を超えたものを教えることも重要と考えており、かなり踏み込んだ目的意識を持っている。

以上、保健体育科教員の考える性教育の目的を保健体育科の枠組みに照らし合わせて分析した。その結果、目的意識は保健体育科の枠内に収まるものだけではなく、他の学校活動における性教育と関わるものもあった。保健体育科教員は全体的に性教育の目的を幅広く捉えているため、目的意識が高いと言えよう。特に、性教育に関心の高い教員は、周囲の教員があまり関心を持たない、学習指導要領の範囲を超えた箇所を教えようとするなど、より高い目的意識を持っている。

3. 保健体育科教員の考える性教育の目的（2）—男女共学／別学による違い

前節では保健体育科における性教育の枠内に留まっているかどうかに着目しつつ、保健体育科の教員が考える性教育の目的を見てきた。本節ではさらに、学校の特性によるものであるかどうかという観点を加えて教員の考える性教育の目的を見ていく。今回は学校の特性として男女共学／別学に着目する。

共学校では、男女混合で性教育を行うことが異性について理解することに繋がり、それが大事であると考えてる教員がいる。

保健（注：性教育）の授業をやる意味というのは、異性の体のことを知って、異性に優しくなれるだとか、異性について、全然自分の体の仕組みとは違うじゃないですか。それを知ることによって、思いやりを持てたりだとか、異性に対する優しさを持てたりだとか、というところだと思います。なので、それを隣で女子がいて男子がいて、という環境でやるのと、男子は男子、女子は女子で分けてしまうのでは、全然受けていて感じ方が変わってくるだろうし、そこでなかなか女子が発言したり、男子が的を射た発言をする、というのはすごい難しいとは思いますが、「何でこんなこと聞かなきゃならねえんだよ」、「何で女性の体のことを知らなきゃいけねえんだよ」という風に、女子がいたら言えないですよね。「あんた知らなくてね、これから子どもが生

まれるだとか結婚するだとか彼女ができるとなったときに、そのことを知らなくていいの本当に。女性のことをちゃんと理解しなくてちゃんと付き合ったり結婚したり子どもが生まれて育てたりできるの」って話になってくると思うんですよ。〔阿久津〕（注は筆者による。以下同様）

阿久津先生は、性教育の時間で異性について知ること、異性に対して思いやりや優しさを持てるようになると考える。特に、将来結婚して子どもができることを踏まえると、異性について理解することは欠かせないと考えている。そのためにも、異性が一緒にいる環境で異性について学習することで、生徒が学習を軽視することなく真面目に取り組むことができると考えている。男女別の環境で行うと、異性がないことを理由に異性の理解を軽視してしまう可能性があるからである。

このように、異性を理解して思いやりや優しさといった異性尊重の気持ちを育てることが性教育の目的として考えられている。高等学校の保健では社会の一員として責任感を身に付けることも目的とされているが、保健の直接的な目的は健康な生活を送れるようにすることである。もちろん、保健で性に関する内容を取り扱うときは異性の尊重について取り上げるよう捕捉されているが、むしろ、異性を尊重する態度を養うことは保健体育科に留まらず性教育全体の目標とすることができる。このことは、これまで確認してきたような性教育の目的を保健体育科の枠を超えて考えている例であるが、同時に共学校という男女が一緒に学ぶ場であるからこそその目的でもある。

ここまで共学校の教員の例を見てきたが、男女別学の学校はどのようなであろうか。今回は各々別の女子校に勤務する2名の教員にインタビューを行ったが、2名とも女子校ゆえの使命感を持って性教育に取り組んでいる。

やっぱり女子校であるということもあるので、女の子たちにしっかり伝えたいと思うこちらの気持ちは強くなりますね。他の分野と比べると余計に。〔池田〕

この発言から、女子校であるということが性教育の大きな推進要因の1つになり得ることが分かる。池田先生は生徒に「しっかり伝えたい」と発言しているが、女子校の教員は生徒に何をしっかりと伝えようとしているのか。三輪先生は女子校で教えるからこそ女子生徒に伝えたいことを次のように話す。

私も今現場で高校生に対してですね、特に女子ですから本校は、いかに今自分の与えられた命が大切なものか、そして今ここにある命がどういう形で育ってきたものなのかという指導を性教育として全部入れています。〔三輪〕

三輪先生は性教育の目的に「命の大切さを伝える」ことを挙げ、女子校であるがゆえに命の大切さを特に指導しなければならないと考えている。つまり、女子に命の大切さを伝えることを重要視して

いる訳であるが、なぜ女子に命の大切さを強調して指導しなければならないのか。それは、女子が生殖や再生産を担う存在として期待されているからである。

特に女子は子どもを産み育てるという役割が男性とは違いあるということで、なおさら命の尊さがいかに大事かということを把握してほしいし、直接自分たちがそういう場になるという自覚をすることが必要だと。〔三輪〕

本校は女子のみということで次の世代を育てる立場にもいるので、出来ればそういう講座（注：夏休み前に行う保健に関する講話のこと。）を設けようということで、ずっとやってきている部分もあるんですね。〔三輪〕

上記の発言はいずれも三輪先生の発言であるが、女子教育を担う女子校の教員は子どもを産み育てるという女性特有の役割を女子生徒に認識させることが性教育の目的の1つと考えていることが分かる。生殖に着目することは保健体育科における性教育の目的に沿っていることであるが、女子校ではそのことをより強調しており、女性として生殖を担う存在であることを理解させることにより重点を置いている。

以上のように、同じ保健体育科における性教育であっても、学校の特性によって教員の考える目的は異なるのであり、それぞれの学校の特性を生かした目的を持っていることが分かった。

4. おわりに

本稿では、関東地方にある私立の中学校と高等学校に勤務する保健体育科教員が考える性教育の目的を、それが保健体育科の枠内に留まっているかと、それが学校の特性によるものであるかという2点に着目して分析した。1点目に関して、今回の調査対象の教員が考える性教育の目的は、保健体育科の枠内に収まるものだけではなく、他の学校活動における性教育と関わるものもあった。保健体育科教員は全体的に性教育の目的を幅広く捉えているため、目的意識が高いと言えよう。特に、性教育に関心の高い教員は、周囲の教員があまり関心を持たない、学習指導要領の範囲を超えた箇所を教えようとするなど、より高い目的意識を持っている。2点目に関して、今回は男女共学／別学に着目したが、共学校の教員は男女共学を活かした性教育の目的を持ち、特に女子校の教員は女子教育という観点から性教育を重視していた。同じ保健体育科における性教育でも学校の特性によって教員の考える目的は異なり、それぞれの学校の特性を生かした目的を持っていることが分かった。

以上のことから、保健体育科教員の性教育への目的意識は高く、社会から学校に対する性教育への期待にも十分応え得るものであると言える。また、学校に寄せられる社会の期待は学校ごとに異なる。そのため、学校の特性に応じて教員の目的意識が異なることは、教員が各々の学校への期待に応じているからであるとも言えよう。

今後の課題として、今回の調査は教員の勤務校が関東地方の私立校に限られたので、公立校の教員を対象とした調査が求められる。また、第1節で述べたように、先行研究によれば性教育を行う際に恥ずかしさを感じる、あるいは学校よりも家庭で実施することが望ましいと考える教員もいる。本稿の結論との矛盾が生じる理由は紙幅の都合上、稿を改めて検討したい。

- 注(1) LGBTはL: Lesbian（レズビアン・女性同性愛者）、G: Gay（ゲイ・男性同性愛者）、B: Bisexual（バイセクシュアル・両性愛者）、T: Transgender（トランスジェンダー・性別越境者）のことであり、性的少数者の代名詞として用いられる。これらの他に性分化疾患、無性愛者も性的少数者に含まれる。
- (2) A 中学校・高等学校は中高一貫校であるが、僅かながら高等学校から入学する生徒もいる。
- (3) D 中学校・高等学校も中高一貫校で、高等学校からの入学者は受け付けていない。
- (4) 『学校における性教育の考え方、進め方』によれば、〈性〉には生理的・心理的・社会的な各側面があるとされる（反橋2016）。
- (5) 2013年に文部科学省が全国の義務諸学校を対象に「学校における性同一性障害に係る対応に関する状況調査」を実施したように、少しずつ関心が高まっているとは言える。

引用文献

- 遠藤紗貴子・中野明徳, 2006, 「思春期・青年期における性教育のあり方についての一考察—教員へのアンケート調査から—」『福島大学総合教育研究センター紀要』創刊号, pp. 9-16.
- 橋本紀子他, 2011, 「日本の中学校における性教育の現状と課題」『教育学研究室紀要—「教育とジェンダー研究」第9号, pp. 3-20.
- 茂木輝順, 2007, 「戦後日本における性教育の手引き類及び実践計画の変遷に関する研究」『教育学研究室紀要—「教育とジェンダー研究」第7号, pp. 1-14.
- 文部科学省 2008, 「中学校学習指導要領」
- 2009, 「高等学校学習指導要領」
- 中澤智恵, 2013, 「性情報源として学校の果たす役割—性知識の伝達という観点から—」日本性教育協会編『「若者の性」白書 第7回青少年の性行動全国調査報告』, pp. 177-198.
- 岡部恵子・佐鹿孝子・大森智美他, 2009, 「大学生の認識をもとにした高等学校における性教育の現状と課題（第1報）」『母性衛生』第50巻2号, pp. 343-351.
- 反橋一憲, 2016, 「保健体育科における性教育の位置付けと目標・内容に関する一考察」『早稲田大学教育学会紀要』第17号, pp. 88-95.
- 田代美江子・艮香織・渡辺大輔, 2009, 「日本における性教育の実態—性教育に関心のある教員を対象とした実態調査—」『日本教育学会第68回大会研究発表要項』 pp. 382-383.
- 植谷亜希子・篠木絵理・藤井可苗・阿保順子・横井寿之, 2009, 「高校生の性と性教育に対する教員の意識」『北海道医療大学看護福祉学部紀要』第16号, pp. 69-73.